

平成二十一年四月一日発行（毎月1回1日発行） 通巻八三二号
昭和二十五年四月三日第三種郵便物認可

火星

平成二十一年四月号



七曜抄 (六)

山尾玉藻

氷室近くて金縷梅の花ざかり

卒業期雪嶺は雲よせつけず

雲梯をひと渡りして卒業す

三月の老人くさき揚梅よ

失礼にあたらぬほどの春の服
潮の引く方へ方へとしやぼん玉
蒼穹に飽きゐる春の大蘇鉄
やや遠に剪定の音加はりし
膝の上のそぼろ弁当抱卵期
クレソンの叢より叢へ春の水

太白星

柳生千枝子

日脚伸ぶ独りの一日長くして
二ヶ月といふ約束もなき一ト日
きしきしと冬菜を洗ひ了りけり
白梅の香高く咲きみちたる木
春寂しとも嬉しとも思ひたる
初旅といふ初めての旅始まる
初旅といふ語感佳し歩みそめ

杉浦典子

雪原へつながるノブを押しにけり
灯の端に立てられてあり雪簞

氷柱つらら一本づつに朝日差す
破魔矢立て朝の山気を押しゆけり
このわたや松の梢を風渡る
空澄みてマイクに対ふ三日かな
音立てて囃む畑のもの餅あはひ

浜口高子

日をはじく馬穴に溜る去年の水
正月の貌して現れし山椒魚
焼栗の爆ぜ滝道の淑気かな
錦市場繭玉の影定まらず
あらたまの眼くるりと太郎冠者
馬術部のバケツ湯気たつ二日かな
鷹の影かすめし聖護院大根畑

火星作品

山尾玉藻選

年玉の出すときありぬ出しにけり
大和郡山 城 孝子

海面にならぶ舟屋の淑気かな

ほとけ等のでこ大きかり初景色

竹馬に蹤いてあるけば日の暮れし

どんど跡つつく鶏しかられし

祓はれて福笹重くなりけり
宝塚 山本耀子

水碧き河豚のいけすに雪降りこむ

大寒の一舟もなき舟屋かな

紅のこる鯨の干ものに湯ざめせる

風花の道に出つ張る花屋かな

羽搏つて風たしかむる初鴉
明石 戸栗末廣

いかのぼりいつもとほくの景色なる

月明の蓋はづしある海鼠桶

茶畑に人の出てゐる五日かな
片足はせせらぎの中どんど焼
旋回の鷹に夕波つりのけり
浮寝鳥ひそやかに水奪ひ合ひ
ひしめける鴨のつむりや寒の入
松過の検番に入る出前桶
初泣の子に家中のかまひけり
浅葱幕ふり落されし淑気かな
日おもてに杳の音する松の内
湯の桶に白骨郷の初灯
海よりの初日に染まる校舎かな
梅香る弁財天の胡座かな
破魔矢受く山に眠れるとりけもの
玉葱を切つて涙す三日かな
年寄におやつの間室の花
寒声の毛馬の対岸明け来たり
笹鳴や自分のためのお赤飯

宝塚 蘭定かず子

八幡 飯塚 糸子

大山 文子

選のあとに

山尾 玉藻

年玉の出すときありぬ出しにけり 城 孝子

人に何かをプレゼントする時はさり気なく渡したいものである。殊に、「お年玉」は子供が内心期待しているものであり、その気持に何気なく応えて喜ばせるのが大人というものである。「出すときありぬ出しにけり」は、そんな分別をわかまえた大人の心中を述べたものであり、「お年玉」のあるべき趣向を言い得ている。この句、句会後の酒席における席題詠であり、その場にいた全員を軍門に下した一句である。

祓はれて福笹重くなりにけり 山本 耀子

米俵、鯛、千両箱などを結って貰った「福笹」が快く撓い、その手心えに満足の作者であつたのだらう。その上、巫女さんの鈴のお祓いを受け、愈々納得したのである。「祓はれて」重くなる筈はないのだが、そう感じたところが大変人間的である。大枚をほたいて授かった「福笹」なのだから。

いかのぼりいつもとほくの景色なる 戸栗 末廣

「いつもとほくの景色なる」とは極めて具体性を欠く表現である。ところがこの甚だ抽象的な景が「いかのぼり」とモニタージュすることで、読み手のところに懐かしく温かな景として具現化される。大空に悠揚とする「いかのぼり」の景

を遠く眺めると、誰もが瑞々しく美しい思いを抱くものである。その共通体験が懐かしくも温かな景をここに結ばせるのである。まず初春特有の穏やかさを表出している。

浮寝鳥ひそやかに水奪ひ合ひ 蘭定かず子

「浮寝鳥」の群は一見のんびりとした様子だが、実際には常に足を動かし、流れに流されぬように、また自分の浮くスペースを保持しているのであらう。その様子を「ひそやかに水奪ひ合ひ」と表現し、まことに的確かつ詩的である。言葉が実をしつかりとおさえており、その点で自己のこのころの眼を存分に働かせた自然観照の一句と言えよう。

湯の桶に白骨郷の初灯 飯塚 糸子

「白骨郷」とは乗鞍岳の山腹にある温泉地で、鉱泉に含まれる石灰石が湯舟に付着することで知られている。湯桶に汲まれた乳白色の湯に映る「初灯」が、ぼんやりと揺れているのであらう。地名「白骨」の語韻が不思議な清浄さを醸しだし、鄙びた新春の風情を一層深いものにしてている。

破魔矢受く山に眠れるとりけもの 大山 文子

作者は八幡の住人、未明の男山岩清水八幡宮へ初詣をされたのであらう。人は「破魔矢」を授かると急に慙慙に畏まった気分となるものである。作者もそんな気分となり、山中の暗闇で寒々と眠る「とりけもの」のことをふと思つたのである。やがて曙光に男山も染められ、初日が鳥や獣たちに優しくそがれることであらう。

(以下略)

恒星圈

深澤 鱧

太郎月嬰のかたこと花のごとし
笄は母の駒なり絵双六
箸あそぶ嬰の食ひ初め玉霰
福笑ひ嬰の糸まひとなりゆける
戎笹雪の雫をかづき来し

波田美智子

堀 志 皋

太箸に曾孫二人が増えにけり
大泣きの赤子もゐたる初写真
校庭の大縄飛びや午後三時
連山は藍色重ぬ寒見舞
笹鳴や父の愛せし萩茶碗

鉄を切り削り溶接初仕事
サッカーと野球見下ろす奴胤
青鷺の首たたみをり寒の月
座布団の窪みいろいろ柳箸
読初の先づは鬼平犯科帳

廣畑 忠明

丸山 照子

寒すずめ炭焼く煙匂ひけり
枝移る障子の影の寒雀
今朝妻の髪整へる福寿草
病める眼にぼんやり雪の箕面山
初声を臥して眺むる障子影

飛火野の空まさをなる恵方かな
翡翠の色のよぎりし二日かな
緋袴と礼して四日暮れにけり
白鳥の胸より入りし枯葦原
宙押してゐる逆立ちの鴨の尻

獅子座

山尾玉藻推薦

緒方佳子

手拭を開いて読めり初寄場
屠蘇二杯祝うて卒寿ねまりけり
底冷や錦市場の玉ぎよくうどん
初戎先づは焚火の輪に入りて

高橋芳子

老犬の腹のももいろ寒に入る
母の呼ぶ声して松の雪垂る
二人居に金魚ひらひら年明くる
風花に犬の歩みの老いにけり

松山直美

水煙に眉月の添ふ寒さかな
赤あか面かづらの見得に拍手や初小袖
着ぶくれて不足の貌をのせてをり
遠近に湯気立ちはじめ冬田かな

岩井ひろこ

大寒や乳房に触るる聴診器
風花や最終便に間に合はず
蹲踞を猫の覗きし四温かな
門松のどつしり置かれ味噌問屋

白数康弘

むき出しの丸太天井寒造
酒蔵に入るに脱ぎたる冬帽子
臘梅や試飲の酒をふくみおて
酒蔵にゐて如月の雨の音

伊勢きみこ

初雀日照雨の中の枝移り
年玉の印伝財布匂ふなり
蒸し鮎を食うべ七福詣かな
人の訃に綿入羽織る夕ごころ

渡辺数子

体操は伸びをするのみ花八ツ手
金色の仏に近き枯蓮
寒牡丹花びら外るとき見たり
人影に疲れて暮るる寒牡丹